

茨木市史

律令国家と貴族社会

荘園制と武家社会

ドイツ農民戦争

人文地理学の諸問題

BEITRÄGE ZUR GENESE DER

SIEDLUNGS-UND AGRARLA-

NDSCNAFT IN EUROPA

青銅遺物目録

京都大学イラン・アフガニスタン・パ

キスタン学術調査報告書(考古学関

係)

茨木市史編集委員会編

茨木市史

本書は市制二〇周年記念行事の一として刊行された。原始古代より現代に至る茨木地域の歴史を一〇章に分けて詳述してある。古代の二章九六頁、中世の二章一〇六頁、近世の三章一九四頁、近代の二章一五〇頁、現代一章一四二頁で均衡のとれた編集であ

るが、近世の部分を中心に学問的にも水準の高い叙述によって充実した一巻をなしている。第一章では市域に遺跡のない縄文以前も含めて、要領よく六世紀までの歴史の流れと古墳等の遺構を紹介している。第二章「律令時代の茨木」では、最近の諸学説も引用されて、条里制の復元など厳密な研究のあとがうかがわれる。大田麿寺と中臣太田連に関する詳細な考証なども手がたい叙述である。第三章「中世の茨木」では、まず摂関家領を中心とする諸庄園が整理されている。総持寺所領の分析は後掲の所領目録などとあわせ、興味深い素材である。有名な垂水東牧については、「永昌記紙背文書」なども引用して近衛家から春日社への支配権の推移が述べられている。勝尾寺文書によって永作手田の性格をのべ、名の解体・惣の成立などにふれて、南北朝・室町期に移る。ここで宿久庄と勝尾寺の堺相論によって惣村の発展をのべ、土豪茨木氏などの在地領主制が停滞する畿内の在地構造の特色と、細川氏をめぐる戦乱と複雑な政治関係が説明されている。第四章「中世茨木の文化」では、総持寺・忍頂寺・真宗諸寺院を中心に述べられている。真宗は茨木

地方でも蓮如以降急速に発展し後世確認しうる寺院は三六カ寺を数える。宿久の猿楽座については能勢朝次・森末義彰両氏の説を紹介したあと、永享年間以後他の座に吸収されたとする旧説に対し、周辺の民衆と結びついていった可能性を追求している。興味深いのはクルス山遺跡にみられる中世の共同火葬墓の報告である。多数の墓が石仏や五輪塔を伴って発見されたが、近世とは断絶していることが確認されている。以上の中世の部分は勝尾寺との関係が深いので『箕面市史』と相補う面が多い。

第五章「近世封建制の成立と展開」では、信長入京後、荒木村重と和田惟政の戦いをへて高山右近・中川清秀による支配、山崎合戦後の秀吉直轄地という政治史の叙述のあとに、太閤検地の施行が詳細に述べられている。その前提となる戦国大名の支配については、当時の社会階層を創意的な図で示し、支配の矛盾を土豪・有力農民の存在に焦点をあて「蛸が足をかじる」例にたとえ、その克服として出てくる太閤検地の歴史的役割を明快に述べた後、茨木地方の検地帳の分析が行なわれている。年代の差を通して村毎の生産条件の差にもふれてい

る。次に江戸時代の茨木は天領や高槻藩主永井氏の所領をはじめ入組・変動が激しい。地域別の領主の変遷表だけで四頁に及んでいる。この複雑な領有関係を七つの類型に区分し、これを色分けした所領配置図が別刷で附けられている。さらにこれら領主を藩主・旗本・天領の別に考証している。この分析や附図は、最近の天領・旗本領の歴史地理学的研究にとって貴重な素材となるだろう。続いて幕藩領主の支配政策として寛永・寛文の地改め、延宝検地、水利整備、貢租内容、農民統制等の叙述でこの章は終わっている。第六章は「近世産業の展開」で、安威川沿いの水論や、一八世紀末にはじまる寒天業など農林商工の諸産業にふれ、近世後期の農村構造の変化が述べられる。すなわち一方では中農層が土地・貨幣を集積し、他方で貧農が没落、年季奉公人を放出し、富農経営が発展する。そして幕末に藩財政の窮乏から幕藩制の危機に至るといふ。

第七章「近世文化と庶民生活」に移ると、当地は高山氏の影響でキリシタンが多く、弾圧後ともいゆる隠れキリシタンの伝統が続ぎ、多くの遺物が紹介されている。また、宗

門改帳による家族制度の分析などのほか、寒天屋節の紹介がある。山間の寒天作業時にうたわれた民謡で、幾系統も残されている節が採譜され、うち三曲の楽譜が掲載されているが、これは地方誌編集では珍しい試みであろう。

第八章「明治維新と茨木地方」は明治二〇年頃までの行政区画の変遷、地租改正、小学校の沿革や統計、殖産興業等に関する叙述が豊富な史料にもとづいてなされている。町村制施行後敗戦までを扱ったのが第九章「地方自治の成立と戦時体制」で、行政・教育・経済・文化の各分野がもれなく扱われ、米騒動後の小作争議にもふれている。戦後を扱った第一〇章「茨木市の成立」は一章としては最も多くの頁数があてられ、七節からなっているが、うち第六節が「市民生活と市民運動」にさかれている。阿武山原子炉設置反対運動をはじめ組合運動・平和運動・部落解放運動などの他に万博市民運動まで紹介されている。万博ムードに傾く茨木市の中に流れる市民の声を反映して特色ある項である。

ものである。とくに「常称寺所蔵文書」の総持寺領の諸帳は貴重である。文和元年「総持寺領散在田畠目録写」、文安二年「総持寺散在所領取帳写」、天正七年「総持寺領名寄帳」の三点で、本文でも分析の結果が叙述されている。その他「永昌記紙背文書」から垂水東牧関係文書が四点、忍頂寺関係では「仁和寺文書」から一〇点ほどが掲載されている。

以上、詳細・堅実な内容を編纂開始後二年足らずの間に、史料の探訪・整理とあわせて書き上げた編集委員の方々の労はひとかたでなかったと思われる。

(A5判 本文六九二頁・史料編八七頁)
昭和四四年六月 茨木市役所刊
(村田修三)

竹内理三博士還暦記念会編

律令国家と貴族社会

荘園制と武家社会

この二著は、竹内理三博士の還暦と退官を記念して編纂された論文集である。竹内博士は明治四〇年愛知県知多町岡田の生まれ。半田中学校・八高を経て昭和五年東大